

# 川越における近世以降の 火災の被害と蔵造りに関する考察

小野澤 拓

目次	頁
第1章 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	2
1.1 研究背景と目的	
1.2 川越の概要	
第2章 松平信綱の入封とその後の川越・・・・・・・・	3
2.1 松平信綱の川越復興	
2.2 地域の広がりと人口の推移	
第3章 川越の火災被害・・・・・・・・・・・・・・・・	5
3.1 江戸の火災との比較	
3.2 川越火災の状況	
第4章 川越の蔵造り建物の概要・・・・・・・・	9
4.1 蔵造り建物の概要	
4.2 川越蔵造り繁栄の契機	
第5章 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・	12

## 第1章 はじめに

### 1.1 研究背景と目的

川越についての研究は、蔵造り建物を中心としたものが多く、火災に関しても同じ事が言える。ゆえに近世以降の火災被害など広範囲にわたって研究しているものが少ないのが現状である。そして、江戸などの火災との関連、比較を考察している研究もない。江戸の都市計画<sup>①</sup>では、明暦の大火（1657）後に『江戸の復興は、誰が行うかということが協議された時に、信綱は真っ先に手を挙げた。他の老中たちも異論はなかった。というのは、松平信綱（1596～1662年）は川越城主であった時に、すでに、川越の大火といわれた寛永15年（1638）の川越の大火後に、見事な復興計画を立て、実行したばかりだったからである。』と記されている。川越の大火（1638）とその後の対応を調べることによって江戸の防火対策へのつながりを知ることができると考え、寛永10年（1633）から大正11年（1922）までの川越の火災の被害を分析した。

### 1.2 川越の概要

川越は武蔵野台地の東北端に位置し、入間川が西部より北部、東部へと流れ、古代から自然環境に恵まれた所であった。現在の川越の町づくりの基は、太田道真、道灌父子が長禄元年（1457）に上杉氏の居城として築城してからのことである。

埼玉県南西部地域の中心都市として発展した。近年では、首都圏に位置する「歴史と文化のまち」として脚光を浴び、古さと新しさが共生し、川越まつり・市立博物館・市立美術館・多くの文化財などの観光資源とあいまって、年間 およそ 600 万人の観光客が訪れている。

民間事業による駅前整備など、都市の近代化によって、まちは活気のあるものとしてさらなる発展を遂げている。また、歴史のある町並みの保全とともに既存の景観との調和に配慮した都市景観を尊重したまちづくりが進められている。

## 第2章 松平信綱の入封とその後の川越

### 2.1 松平信綱の川越復興

松平信綱は寛永16年（1639）1月5日川越に入封した。島原の乱鎮圧の功によるものと言われている。信綱の入封以前の寛永15年（1638）1月28日の川越大火で城郭の大部分と城下町の一部を失った。

信綱は、川越城を再建し、外曲輪、田曲輪、新曲輪の修築・拡張を行った。信綱は、川越城を再建し、川越城の拡張に伴い、城下も都市計画の一部として十ヶ町<sup>注1)</sup>という市街地の商業要素の集中した地域を設けた。武蔵野台地上の広大な未墾地の開発にも力を注いだ。新座郡野火止新田はその一環とされていた。<sup>②、③</sup>

### 2.2 地域の広がりと人口の推移

松平信綱による十ヶ町の整備以降それをベースに（表1）で表したように各村との合併を繰り返し、大正11年には、川越市となり埼玉県内では初めて市制が施行された。

（図1）のように旧川越町は2.86km<sup>2</sup>、川越町は8.35km<sup>2</sup>、川越市は14.22km<sup>2</sup>と拡大していった。それに伴い、（図2）であるように人口も明治22年（1889）の合併直前は9861人に対し、合併直後は、15643人となり、地域が広がったことにより、人口も増え続け、大正11年（1922）の合併直後30359人にまで増加し、30年ほどで2倍と著しく増加している。

表1 川越市の合併の歴史<sup>④</sup>

1869年以前	1889年（明治22年）	1922年（大正11年）
旧川越町 <sup>注2)</sup>	川越町	川越市
松郷		
東明寺村		
寺井村		
小久保村		
脇田村		
小仙波村		
野田村（一部）		
大仙波村	仙波村	
大仙波新田		
岸村		
新宿村		



緑色…旧川越町  
 水色…明治 22 年合併  
 青色…大正 11 年合併

図 1 川越市域の広がり④、⑦

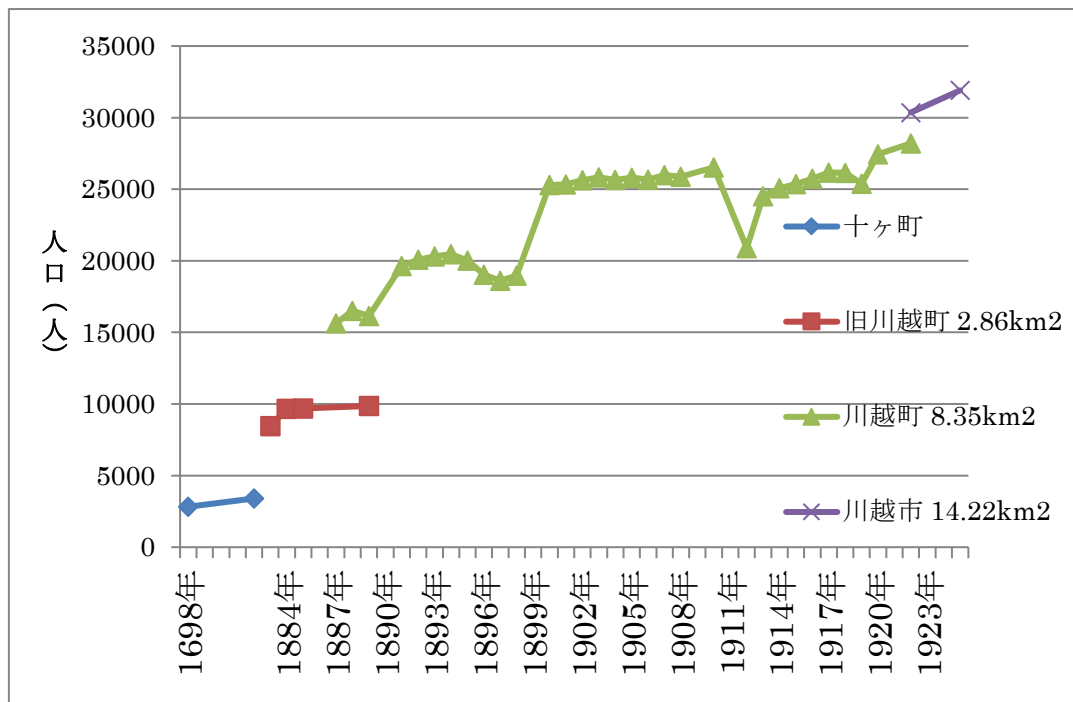


図 2 川越人口の推移

## 第3章 川越の火災被害

### 3.1 火災被害の概要

江戸時代は、全国的に都市の発展した時代であった。しかし、どの都市でも人口の密集や冬季の季節風という自然条件に加え、ほとんどの建物が木や紙でできているという日本家屋の特徴などにより、都市に火災をつきものであった。

川越で起きた主の出来事が当時の江戸の出来事とともに記載されている文献<sup>⑥</sup>と川越大火（1893年）を軸にその他大火の被害状況や町火消の成立などをまとめた文献<sup>⑦</sup>を参考に川越火災年表（巻末付録）を作成した。そこから川越では、寛永10年（1633）から大正11年（1922）までの間に規模は問わず、出火が確認できたものが84件発生していることが確認できた。

防火対策として初めて講じられたのは、江戸時代に書かれたのは、川越の地誌としては最も古く、内容は川越の町々、神社、寺院、旧跡に関する出来事が記載されている文献<sup>⑧</sup>によると享保3年（1718）の火災時に広小路の造成、城下にあった塩硝蔵の移転、火除けのための植林などが挙げられているのだが、この時に松平信綱はすでに亡くなっていて、防火対策に関わったとは断言できない。

### 3.2 江戸の火災との比較

ここで江戸との火災の比較を試みる。

江戸の火災は、記録に残っているだけでも2000件近くあったとされており、「火事と喧嘩は江戸の華」として江戸を代表するひとつに挙げられている。

ここでは、寛永10年（1633）から慶応3年（1868）までの範囲の458件を対象とした。（小火災に関しては、数が明確でないため、焼失面積500坪（1653m<sup>2</sup>）以上のものを抜粋した。）

（表3）では、市域、人口などが大きく違うため、数値としては、比較にならないが、冬に出火が多く、夏には少ないという部分では、共通している。

年間の出火件数では比較が難しく、時代ごとの差を明確にするために（表4）では、10年ごとの出火件数を比較した。結果として、○で囲っている1700年代前半と後半に川越、江戸ともに似たような推移をしている。

この2つの期間の主な出来事として享保の大飢饉（1732年）、天明の大飢饉（1782～1787年）が発生している。後半○の期間は、天明の大飢饉と一致し、川越、江戸ともに火災が急増しているのだが、前半○の期間では、享保の大飢饉とは時期がずれているため、飢饉との関連は、なかったのではないかと推測できる。

表3 月別出火件数(全 川越 90 件 江戸 458 件)<sup>⑥、⑦、⑧</sup>

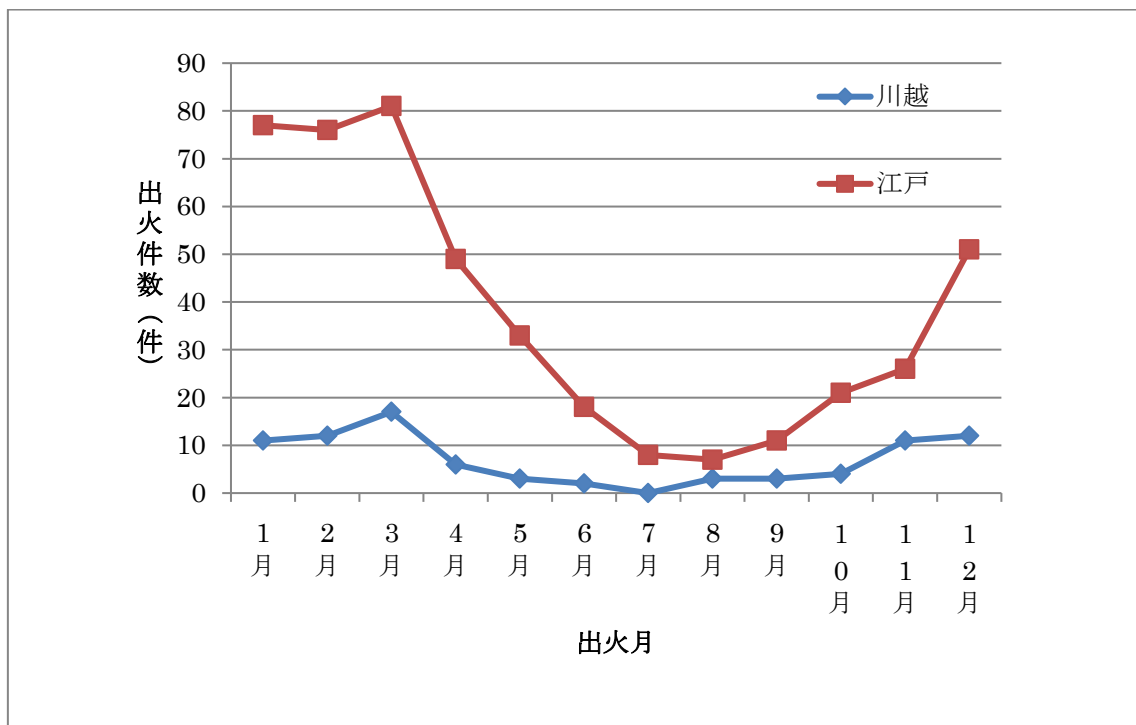
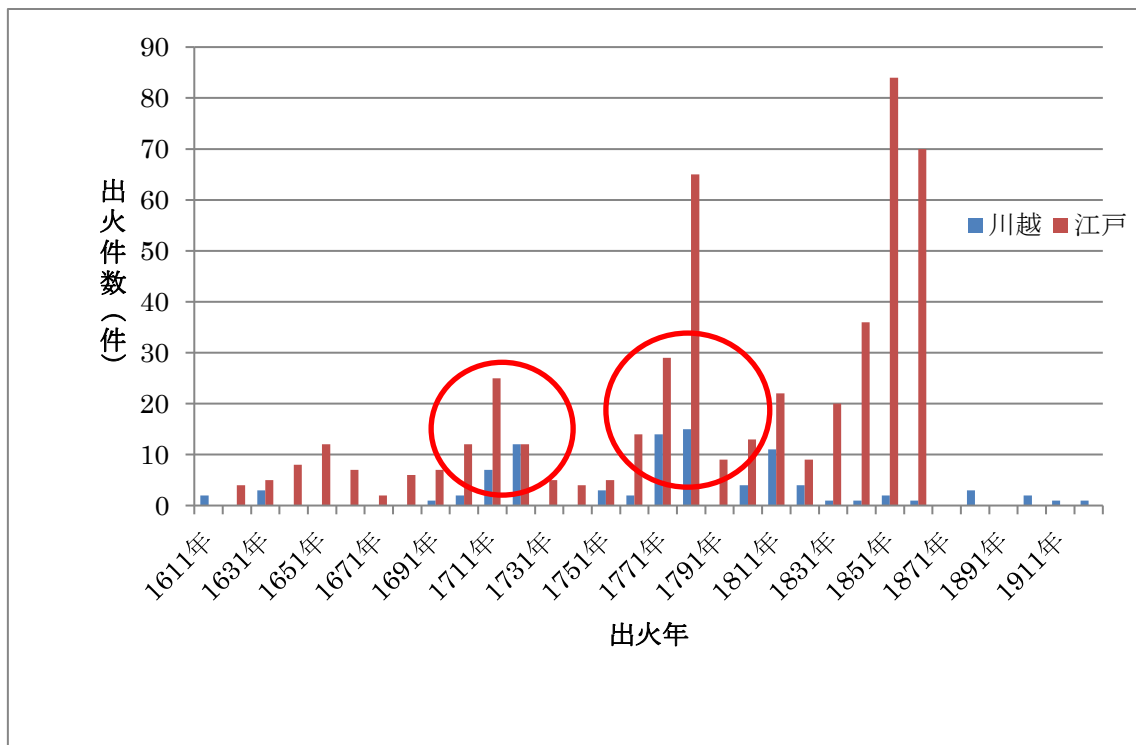


表4 10年毎の出火件数(全 川越 90 件 江戸 458 件)<sup>⑥、⑦、⑧</sup>



### 3.3 川越火災の状況

発生した火災の状況を知るために川越火災年表を参考に地図上に出火点（確認できるだけで 43 件）とされる町を地図上<sup>④</sup>に×でプロットしていき、ほかの町への延焼が文章によって確認できた 7 件火災に関しては、出火点以外に燃え広がったとされる町の範囲もプロットし、出火点と結ぶことによって焼失方向、焼失面積を分析することができた。（図 2）

出火点は、鴨町、久保町、行伝寺周辺、喜多院周辺などに多く分布している。このことからこの地域に鍛冶屋などの火を扱う業種が集中していたのではないかと考えられる。焼失面積を比較してみると享保 14 年（1729）の大火が最も燃え広がっており、規模の大きな火災は、南南東方向へ燃え広がっている。

そこで、焼失方向が分析できた火災を川越観測所（宮下町）での 2012 年の風速風配図（図 3）と比較する。この風配図から 12 月～3 月までの期間は、どれも北北西の風が多く吹いている傾向にある。

これらから焼失面積が 1km<sup>2</sup> 以上の寛永 15 年 1 月、享保 3 年 12 月、明治 26 年 3 月の火災は、どれも北北西の風を受けて延焼していることがわかり、風向と焼失方向がほぼ一致する。

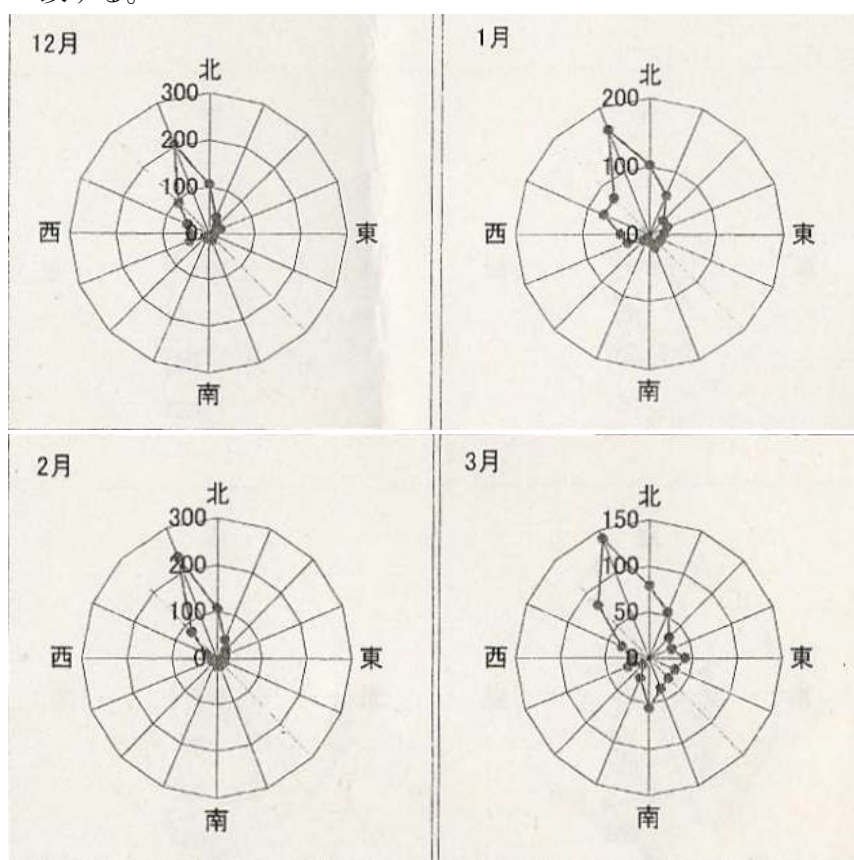
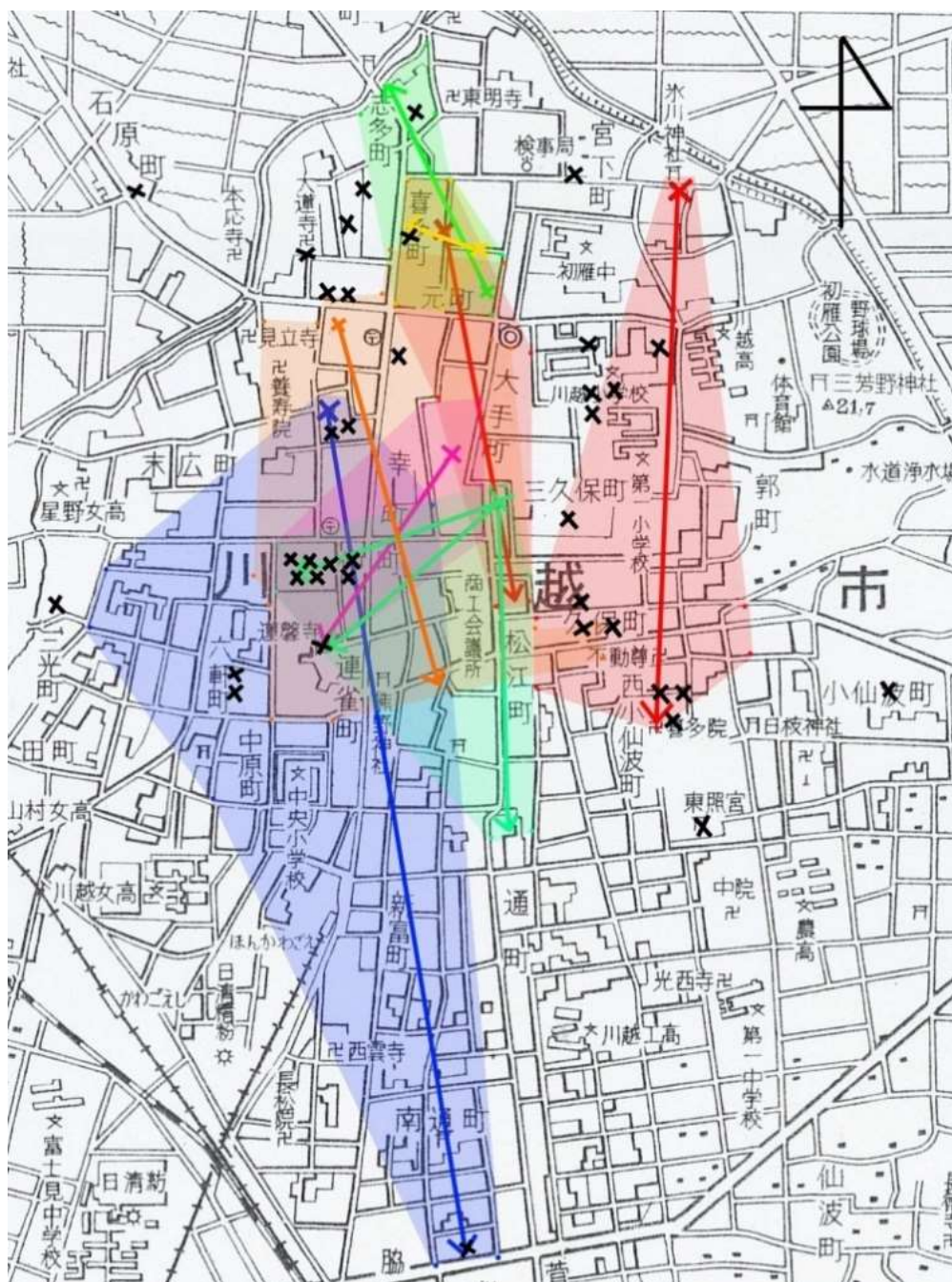


図 3 川越の風向風配図<sup>⑤</sup>





× 出火点

赤色	寛永 15 年	1638 年	1 月	1.65km <sup>2</sup>	青色	享保 3 年	1718 年	12 月	2.11km <sup>2</sup>
黄緑色	享保 10 年	1726 年	3 月	0.4km <sup>2</sup>	黄色	享保 14 年	1729 年	2 月	0.17km <sup>2</sup>
紫色	宝暦 9 年	1759 年	9 月	0.53km <sup>2</sup>	緑色	安永 7 年	1778 年	1 月	0.82km <sup>2</sup>
朱色	明治 26 年	1893 年	3 月	1.9km <sup>2</sup>					

図 2 1633 年から 1922 年までの出火点と焼失面積<sup>⑥、⑦、⑧</sup>

## 第4章 川越と蔵造り

### 4.1 蔵造り建物の概要

蔵造りとは、防火の目的をもって建物の壁体を土蔵としたもので、江戸では享保年間（1716～35）に幕府が防火建築として土蔵造り・塗家造り<sup>注3)</sup>を奨励した。

享保5年（1720）に江戸で瓦屋根が許され、蔵造り・塗家造りが奨励された。大火の度に町触によって推し進められた町家の土蔵造り・塗家造り化は、大正12年の関東大震災を期に一般の町家における防火建築としての地位をコンクリート造やモルタル造りに譲ることとなった。

川越に蔵造り・塗家造りの商家が建ち並んだのは明治26年の川越大火以降とされている。この大火は明治26年（1893）3月17日午後8時ごろに養寿院門前より出火し、当時の川越町3315戸の1/3にあたる1302戸を焼失した。現在、伝統的建造物保存区域（幸町全域、元町、仲町の一部）には50件の土蔵造りが残されている。<sup>⑨、⑩</sup> 町の中心街（十カ町）での火災であったためこれほどまでに被害が出たのだと考えられる。

### 4.2 川越蔵造り繁栄の契機

前項にもあるように様々な文献で明治26年（1893）大火を契機に川越では、蔵造りの町として繁栄してきたと記述されている。しかし、どの文献も『この猛火の中に幾つかの蔵造りと土蔵が厳然として焼け残って、人びとの注目を浴びた。』<sup>⑩</sup>（p39）などと曖昧な表現がされているものが多く、明確に証明ができていないものがない。

そこで本項では、それに関連するであろう要素をいくつか挙げ、「明治26年（1893）大火が川越蔵造り繁栄の契機となった」という論説を確かなものとするを目的とする。

まず、文献には、根拠として（表5）が挙げられている。この表は、各町ごとの焼失戸数、半焼土蔵数、全焼土蔵数をまとめたものである。

この表は、要素としては有効なものではあるが、この統計だけでは、戸数における土蔵の全数が記述されていないため、この大火を契機に人びとの意識が変わったとは断言できない。

次に、明治26年（1893）大火の前後での行政としての変化があったのかを当時の各県で定められた行政事業や教育から庶民の生活にいたるまでの規則を記載した文献<sup>⑪、⑫</sup>の消防に関するもの比較した。

明治25年（1892）は消防組の人員、器具などに終始しているが明治30年（1897）は明治25年の内容に加え、組員に対する給料、保障、服装など多岐に渡っていて、職業として確立されている印象である。

よって、明治25年～30年（1892～1897）に主だった火災はこの大火だけであるのでこの大火を契機に行政として意識が変わったのは明らかである。

しかし、この時期の県令には、建物法規に関する記述はなく、行政として蔵造りを奨励し、蔵造りの建造を義務付けたというわけではなさそうである。

また、(図 3) は明治 26 年 (1893) 大火の焼失範囲とこの大火で焼け残った現存する土蔵造りを地図上にプロットした分布図なのだが、この図から大火の中、明治 26 年以前に建造した土蔵造りが現存するだけで 9 件焼け残っている。土蔵の全数が明確でないため、断定はできないが、破壊消火<sup>注4)</sup> が主流であった当時のことを考えるとこの焼け残った土蔵は非常に魅力的なものであったのだろう。

ゆえにこれらの要素から明治 26 年大火が川越蔵造り繁栄の契機となったのではないかと推測できる。

表 5 川越大火の焼失戸数<sup>⑩</sup>

町名	戸数	半焼土蔵	全焼土蔵
小仙波町	2	0	
上松江町・鉄砲町	72	12	11
北町	1	1	
久保町	20	5	
本町	128	7	3
下松江町	49	4	7
南町	196	64	19
志義町	72	42	18
鍛冶町	37	24	10
多賀町	99	14	7
相生町	20		
南久保町	9		
北久保町	20	2	
江戸町	124	16	4
高沢町	8		
猪鼻町・連雀町	445	46	17
合計	1302	237	96

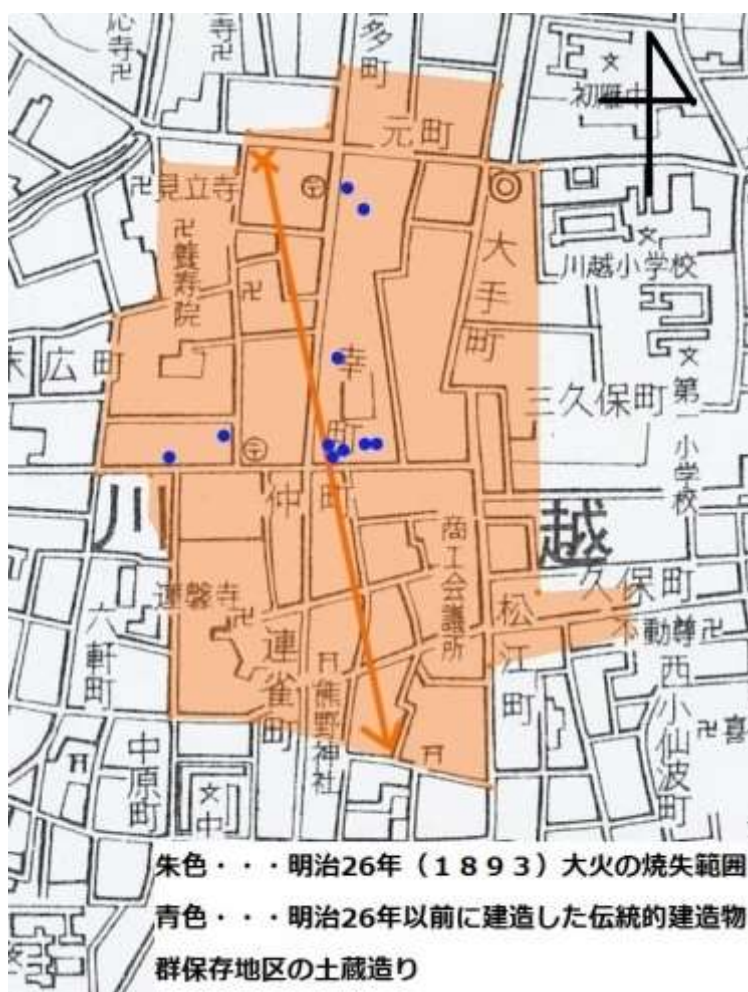


図 4 明治 26 年大火の状況と土蔵造りの分布<sup>⑥、⑦</sup>

## 5. まとめ

松平信綱は大火（1638年）を契機に川越に入封し、川越城、十カ町の整備、野火止用水の開墾などは行ったが、防火対策に関わったことが明確でない。

ゆえに文献<sup>①</sup>にあるような明暦大火と川越大火の防火に関しての因果関係を証明することができなかった。

また、1633年～1922年の江戸と川越の火災の発生状況にも大きな差はなかった。

川越の火災を表や図で各事象ごとに表現することによって具体的に分析することができた。

## 謝辞

本研究を行うに当たり、熱心にご指導頂いた辻本教授、西田准教授、田中工学博士に感謝いたします。皆様のおかげで無事に研究を終わらせることが出来ました。

また、日常、有益な議論をして頂いた研究室の皆様感謝いたします。

小野澤 拓

## 脚注

注1) 十カ町・・・市街地の商業要素の集中した地域に上五カ町を商人町、下五カ町（を職人町とした町割を行った。これは、現在の町の元となっている。当時の行政区というわけではない。

注2) 旧川越町・・・十カ町に加え、7つの町によって構成されている。

注3) 塗家造り・・・一般的に大壁造りと呼ばれるもので、壁を漆喰仕上げとする。江戸時代には、武家屋敷の長屋門などに多く用いられ、土蔵製の壁より少し薄いのが一般的である。

注4) 破壊消火・・・建物や構造物などを破壊して延焼を防ぎ、消火する方法。消防設備や消防網などが十分に発達していない時代では、水などで火を消すことが不可能な場合が多かった。このため延焼を防ぐために火の近くや風下の建物などを壊し、火事との間に十分な空間を作ることで延焼を防ぐ方法を取っていた。

## 参考文献

- ① 童門冬二、『江戸の都市計画』文藝春秋、1999年
- ② 中村彰彦、『知恵伊豆と呼ばれた男』講談社、2009年
- ③ 川越市立博物館、『知恵伊豆 信綱』川越市立博物館、2010年
- ④ 川越市、『川越市史第4巻近代編』東京印書館、1985年
- ⑤ 板倉良矩、『川越素麺』川越図書館、1917年
- ⑥ 川越市、『川越市史年表』東京印書館、1986年
- ⑦ 川越市立博物館、『川越大火百年』川越市立博物館、1993年
- ⑧ 西田幸夫、『考証 江戸の火災は被害が少なかったのか？』住宅新報社、2006年（江戸に関するデータ）
- ⑨ 川越市役所提供、『川越の風配図 [2012年]』
- ⑩ 川越市、『日本の町並み調査報告書集成3 関東の町並み』東洋書林、2004年
- ⑪ 野口弁次郎、『現行埼玉行政法類（明治25年）』三書房、1892年
- ⑫ 著者不明、『現行埼玉県令達類集 下巻（明治30年）』埼玉県内務部、1897年

## 参考地図

- ① 埼玉県、『埼玉縣管内全図 [1/54000]』、埼玉県、1887年
- ② 著者不明、『川越市街図 [1/20000]』塔文社、1965年



## 付録

川越火災年表（時刻に関しては、明記されているものが少なかったため省略する。）

和暦	年号	月	日	西暦	年号	月	日	出火場所及び消失区域
寛永10年				1633年春				喜多町一南町両側一脇田町
寛永12年				1635年				広濟寺火災により荒廃
寛永15年	1	28		1638年	1	28		喜多町一江戸町両側一上松江町境 樹木屋敷の南側侍屋敷一城中一久保町一喜多院
宝永元年	11			1700年1	11			城内柳沢隼人邸が火災
宝永2年	10	16		1702年1	10	16		蓮馨寺境内の民家より出火
宝永7年	3	3		1707年	3	3		蓮馨寺より出火
享保2年	2	18		1717年	2	18		城下より出火
享保2年	12			1717年	12			杉原町より出火
享保3年	12	19		1718年	12	19		杉原行伝寺門前一鳴町北側鍛冶町角迄・南側松郷迄 猪鼻町、蓮馨寺門前、久保、大工町、六軒町、鉦打町、 中原町、瀬尾町、新田町、足軽町、二番町、三番町
享保4年	1	22		1719年	1	22		石原袋町
享保4年	1	26		1719年	1	26		鳴町
享保5年	2	29		1720年	2	29		高沢町大蓮寺前一玄養寺
享保5年	12	28		1720年	12	28		喜多町
享保6年	11	11		1721年	11	11		宿粒村
享保7年	11	13		1722年	11	13		三番町
享保7年	12	27		1722年	12	27		五ヶ村
享保8年	1	6		1723年	1	6		六軒町
享保9年	12	30		1724年	12	30		城内勘定所
享保10年	12	26		1725年	12	26		行伝寺門前 20件程度が類焼
享保11年	3	18		1726年	3	18		本町裏一喜多町一下町
享保11年	8	2		1726年	8	2		新田町
享保12年	2	20		1727年	2	20		五ヶ村
享保12年	4	4		1727年	4	4		鳴町
享保13年				1728年				一乗院(鴨田)火災にあい古記録を焼失
享保14年	2	18		1729年	2	18		裏宿一喜多町
宝暦6年	1	10		1756年	1	10		下町五ヶ村
宝暦9年	9	10		1759年	9	10		川越出火
宝暦9年	9	22		1759年	9	22		多賀町一同心町一鳴町一蓮馨寺門前・鉄砲町
明和4年	2	10		1767年	2	10		久保町
明和4年	10	18		1767年	10	18		川越出火
安永元年	3	13		1772年	3	13		川越出火
安永元年	3	28		1772年	3	28		川越出火
安永4年	12	14		1774年	12	14		志義町 町方379軒、その他の郷分では168軒が焼失
安永6年	3	9		1775年	3	9		六軒町 30軒余が焼失
安永7年	2	4		1777年	2	4		仙波東照宮領
安永7年	1	13		1778年	1	13		上松江町一下松江町・鳴町・蓮馨寺門前 72軒が焼失
安永7年	6	4		1778年	6	4		川越出火
安永7年	6	7		1778年	6	7		川越出火
安永8年	3	2		1779年	3	2		川越南町
安永8年	11	2		1779年	11	2		鳴町
安永8年	11	28		1779年	11	28		志義町
安永9年	10	22		1780年	10	22		川越西町
安永9年	11	22		1780年	11	22		川越出火
安永9年	11	27		1780年	11	27		川越出火

天明元年	12	23	1781年	12	23	川越西町
天明3年	3	9	1783年	3	9	川越出火
天明3年	4	1	1783年	4	1	川越出火
天明4年	1	16	1784年	1	16	川越出火
天明4年	1	17	1784年	1	17	川越出火
天明4年	3	17	1784年	3	17	川越出火
天明4年	11	27	1784年	11	27	川越出火
天明4年	12	1	1784年	12	1	川越出火
天明4年	12	18	1784年	12	18	川越出火
天明4年	12	27	1784年	12	27	川越出火
天明5年	2	8	1785年	2	8	喜多院閣魔堂
天明5年	4	15	1785年	4	15	川越出火
天明6年	3	28	1786年	3	28	小仙波村
天明7年	3	13	1787年	3	13	川越町内出火
天明9年	11	8	1789年	11	8	川越久保町裏通り
文化4年	2	13	1807年	2	13	喜多院門前
文化4年	4	16	1807年	4	16	川越新久保町
文化5年	2	14	1808年	2	14	川越城内出火 根村六之丞宅・白井頼母宅
文化5年	11	12	1808年	11	12	喜多院門前
文化10年	3	25	1813年	3	25	川越5ヶ村辺
文化14年	2		1817年	2		蓮光寺焼失
文化14年	11	13	1817年	11	13	扇河岸
文政元年	5	3	1818月	5	3	川越城下
文政元年	5	18	1818年	5	18	星棒防境内普請小屋
文政元年	8	27	1818年	8	27	川越杉原辺
文政2年	3	27	1819年	3	27	川越鳴町
文政3年	1	27	1820年	1	27	川越宮ノ下
文政3年	2	23	1820年	2	23	川越妙昌寺下
文政3年	3	8	1820年	3	8	田嶋新田
文政3年	9	29	1820年	9	29	川越出火
文政4年	4	29	1821年	4	29	川越南久保町
文政4年	8	3	1821年	8	3	川越城内出火白井頼母宅
文政8年	2	16	1825年	2	16	川越杉原町一六軒町一砂新田
文政12年	3	21	1829年	3	21	川越城下に大火
天保3年			1832年			東陽寺(大袋)
弘化3年	4	15	1846年	4	15	城内住居から出火川越二の丸・武具役所焼失
嘉永5年	10	13	1852年	10	13	川越大火
安政3年	1	16	1856年	1	16	石原町
明治2年	1	16	1869年	1	16	小久保村
明治14年	10	30	1881年	10	30	仙波村大字仙波新田
明治15年	2	9	1882年	2	9	杉原町
明治21年	3	22	1888年	3	22	高沢町
明治26年	3	17	1893年	3	17	川越大火
明治37年	11	24	1904年	11	24	坂上町出火
明治39年	4	20	1906年	4	20	仙波村大字新宿
大正6年	5	10	1917年	5	10	川越相生村
大正11年	12	3	1922年	12	3	川越高沢町
						計92件